

# 水と文学

(5)



前東京都水道局理事 小泉 智和

今年は、江戸幕府が開かれて400年になります。

天正18年（1590）、徳川家康は小田原城攻めに際して、豊臣秀吉から江戸転封を命ぜました。

そこで家康は、江戸入府前、家臣数名に関東・北条氏の残党の動向や江戸城並びに周辺の調査を命じました。中でも、大久保藤五郎忠行には、「駿東5カ国の家臣が移り住む町である。何よりも水が必要になる」と命じたと言います。

この時開かれたのが、飲料水用としては日本最初の上水と言われる、「小石川上水（後の神田上水）」です。

そして、慶長8年（1603）、豊臣に代わって徳川が幕府を江戸を開くと、江戸の町は飛躍的に発展します。そこで水不足を補うべく開かれたのが「玉川上水」で、承応2年（1653）に開削されましたので、今年で350年となります。

この玉川上水開削の労苦を描いた著に、杉本苑子の「玉川兄弟」があります。

## ○ 吉川英治の弟子、杉本苑子

杉本苑子は、大正14年（1925）生まれですから、今年で78歳となります。

東京で生まれ、駒沢高等女学校、千代田女子専門学校を経て文化学院卒業。昭和26年（26歳）の時、「サンデー毎日」の懸賞小説に応募、佳作。翌年、同懸賞小説に入選し、これを機に「宮本武蔵」や「私本大平記」等を書いた歴史小説家の吉川英治に師事します。

英治が唯一許した弟子になりますが、英治は彼女に「10年間は商業誌に作品を発表せず勉強する事」の条件を付けました。彼は、歴史小説を書くに当たっては、フィクションの部分があったとしても史実から大きく離れてはならぬ、それだけにうんと勉強しろと言いたかったのだと思います。彼女はこの教えを守り、英治の許しを得て商業雑誌に初めて発表したのが「柿の木の下で」で、弟子になってから9年後（36歳）のことでした。

翌年、吉川英治逝去、長編歴史小説「孤愁の岸」を執筆、吉川夫人の口利きで講談社から発表。これが翌年の直木賞受賞となります。薩摩藩の濃尾三川治水を描いた傑作です。

毎年多くの作品を発表する中で、昭和48年から49年にかけて、1年2ヶ月、長編「玉川兄弟」を「赤旗」に連載（朝日新

聞社で刊行）します。

そして、昭和53年（1978）「滝沢馬琴」で吉川英治文学賞、同61年（1986）「穢土莊巖（えどしようごん）」で女流文学賞をそれぞれ受賞、平成7年（1995）文化功労者に選出されました。



杉本苑子・江戸上水400周年記念にて

## ○ 孤愁の岸

「玉川兄弟」の前に、彼女の出世作「孤愁の岸」を紹介しておきましょう。

著は、薩摩藩に下った幕命、「濃州、勢州、張州川々御普請御手伝い仰せつけられ候間、その趣き存ぜらるべく候。もっとも此の節、参府に及ばず候。恐々謹言。宝暦3年12月25日 島津薩摩守殿」という40字に足らぬ奉書一片から始まります。

木曾川、長良川、伊尾川三河川の治水工事手伝。薩摩から遠く離れた濃尾の地、莫大な費用。にもかかわらず、利を得るのは幕府、尾洲徳川家、桑名藩、高須藩、大垣藩等です。

幕府と外様大大名との戦い、言うなれば武器を執らずにおこなわれる戦いなのです。

苑子は、薩摩潰しとも取れる理不尽な命令、それに抗議しつつも甘んじて工事手伝いをする薩摩藩士の悲哀を描きますが、最後に、「公儀の低意はどうであれ、われわれが今なしつつある仕事は、国家百年の経綸（けいりん）です。薩摩一国、島津一家中などという小意識をかなぐり捨てて、なぜもっと広く、大きくものを看ようとなさらないのですか。……たとえどのような矛盾、不条理、あるいは醜さ、悲惨を踏まえた上であっても結果が美しければ……三百里外の他国人であっても、けっくは『人の救い』となる事ならば、立派に意義はあるではありませんか。薩摩藩士らは、もっと瞑してよいではありませんか」と結びます。

## ○ 玉川兄弟

苑子は、「孤愁の岸」で当時の治水土木の分野に切り込んで行きますが、それを更に「玉川兄弟」で土木技術事業と技術者の役割と生き様といったものに昇華させていきます。

庄右衛門・清右衛門兄弟が挑んだ玉川上水開削工事は、羽村から四谷大木戸まで43Kmにおよぶ大事業です。

小説は、幕府による計画決定後の業者間の思惑、玉川兄弟と幕府との駆け引き、上水が出来る事によって受益する江戸町民とは反対に不利益を受ける漁民や筏師等との争いを筋道として展開します。

彼女は、この小説で未曾有の難事業に挑む兄弟や幕吏の勇気・精神を描く事に

よって、「日本の男性たちがどこかへ置き忘れてしまった男の美学、男の、真に男らしい魅力を造形したかった」と言っています。

兄弟は、「土木仕事のなかばは、腕っこきで命知らずで、割元との義理人情の絆にふだんから、かたく結ばれている人足集団の質のよしあしできまるのだと」と言い、そして、道奉行伊奈半十郎忠治は、「武士の掟は、命にかかるゆえにきびしいとされているけれども、はじめからその命を投げ出してかかれば、きびしさも何もない」と述べます。

苑子の「玉川兄弟」は、東京都水道局所蔵の「上水記」（都指定有形文化財）等を参考として書かれていますが、開削時のことについては不確かな部分が多いのです。

彼女は、「玉川兄弟」のあとがきで、「小学生の教科書で、玉川兄弟の事歴が紹介されると仄聞し、ほとんどわたしの想像やフィクションの所産である小説を、万が一、事実と混同して読まれる事に恐れを抱いた」と語っています。

そうは言っても、玉川上水は四代将軍家綱を記録した幕府の公式記録である、「嚴有院殿御実記」にも記録が残っていますし、何よりもその遺構が厳然と残つており、今なお東京都水道局の現役の施設として利用されているのは驚きと言えましょう。

「世界遺産に」と言う声もありますが、それは無理としても、近々、「国の史跡指定」を受ける予定です。



玉川兄弟像・羽村取水堰

\*「水と文学」を執筆中の小泉智和氏が昨年「玉川上水ぶらり散歩(併載 神田上水ぶらり散歩・野火止用水ぶらり散歩)」を上梓しました。

朝日新聞にも大きく取り上げられた本です。ご希望の方は、直接、小泉智和氏に電話又はFAXでご注文ください。



A5判129ページ

1,500円（税込み、送料310円別）

小泉智和氏勤務先

電話 03 (3348) 1177

FAX 03 (3348) 1170